特別優秀賞

温かい親切

岩手県　一関第一高等学校附属中学校　一年
横沢　いぶき

私は、赤ちゃんの頃から家を転々として過ごしてきた。母のお腹にいるときに東日本大震災があり、そのときに住んでいたアパートは津波で流されてしまったらしい。そのため、赤ちゃんのときの写真は仮設住宅で撮られたものばかりだ。写真に写る赤ちゃんの私は、知らない人に抱っこされていた。

「この人たちは誰なの。」

と母に聞くと、

「仮設に住んでいたときに、たくさんの人が声をかけてくれて、あなたをみんなが育ててくれたのよ。このアルバムは、お母さんと一緒にあなたを育ててくれた人が写った大切な物なの。あなたの命は、たくさんの人が支えてくれて、今があるんだよ。」

と教えてくれた。

仮設住宅に住む人たちは、母が掃除や料理をするときに、私の面倒をみてくれたり、支援物資の中から赤ちゃんの物を探してきてくれたりしたそうだ。私の家にあるおもちゃには、メッセージが書かれている。

『おばちゃんのこと忘れないでね。これからもたくさん笑って、大きくなってください』

たくさんの人の親切に囲まれて、赤ちゃんの私は成長してきたのだと思った。

釜石市から、宮古市、盛岡市と移り住んできた私の家族は、4 年前に一関市に越してきた。新しい街に引越すたびに、環境に慣れるまでに大きな不安を感じていた。

（早く道を覚えなきゃ。友達はできるかな。仲良くしてくれるかな。どんな先生だろう。）

一関市に越してきたときは、3 年生になっていたこともあり、いつもより不安な気持ちが大きかった。そんなとき、地域の人たちがたくさん声をかけてくれた。

「おはよう。今日はバスケットボールの練習がある日なの？がんばってね。」

「お帰りなさい。暑い中、いつも歩いて偉（えら）いわね。」

「おばあちゃんが作ったおこわなんだけど、食べてみてね。」

「バスケットの大会だったんでしょ。新聞で見たよ。がんばったね。」

たくさんの地域の方が、私に声をかけてくれた。近所の人やスクールガードの人が毎日のように声をかけてくれて、私は嬉しかったし、安心した。心が温かくなった。この街でも、笑顔で暮らしていける、と思った。

私は、まだ 13 歳だけれど、たくさんの人に温かい親切をもらってきた。地域の人や友達、家族。私の周りにこうした人たちがいるおかげで、楽しい毎日を過ごしている。将来、私はどこで何をして生きていくのか、今はまだはっきりと決まっていない。

けれど、もし私のそばで困っている人がいたり、不安そうな顔をしている人がいたら、今度は私が声をかけてあげる、と決めている。